様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：３２６４３
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2013
課題番号：２１５２００２７

研究課題名（和文）心の形而上学的諸問題に関する場所論的考察

研究課題名（英文）The basho theoretical inquiry into the metaphysical problems of mind

研究代表者
冲永　荘八（OKINAGA, Shohachi）

帝京大学・文学部・教授

研究者番号：８０２６９４２２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,300,000円、（間接経費）　990,000円

研究成果の概要（和文）：　脳という物質がなぜ心という物質には見いだせない性質を生み出すのか、心はどのようにして身体と相互作用をなし得るのか、主観性の核としての「私」はなぜ存するようになったか、私たちの意志は決定されているのか、それとも自由意志は存在するのか。こうした問いは形而上学の課題として哲学史上論争が続いてきた。
本研究はこれらの対立を乗り越える概念装置を作り上げるのではなく、そもそもこれらの対立概念を成立せしめている前提に遡り、問題自体を無効化することを試みた。その際、実在を無限定と見なし、反対に概念を実在の限定と見なす西田の場所的論理を応用し、私たちの概念装置の有用性と使用の限界について究明した。

研究成果の概要（英文）：Why brain as material produces mind whose quality doesn't exist in material? How can mind and material interact each others? Why "I" as a core of subjectivity have come to existence? Is our will determined or is it free? Such questions have been argued as metaphisical problems in the history of philosophy.
This reserach has tried to retrospect to the conditions which have sustained those opposite concepts from the beginning and tried to make those probrems themselves invalid, instead of making out conceptual devicies which bridge those concepts. Then, we have applied Nishida's basho theory to that trial which regards reality as the unlimited and regards concepts as limitations of reality, on the contrary. In this way, we have inquired into the usefulness and the limits of applications of our conceptual devices.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学　哲学・倫理学

キーワード：形而上学　クオリア　一人称　自由意志　場所　中立的一元論　概念枠　限定

１．研究開始当初の背景

本研究「心の形而上学的諸問題に関する場所論的考察」は、研究計画の当初より、物心の二元的対立について、中立的な場所から物心の両方を位置づけ直すことのできる視点を探し求めていた。それは物理的一元論の中に心を位置づけることではなく、また物と心とを同一カテゴリーの両端に位置づけて、その中央の位置を探ろうとするものでもなかった。むしろ、物も心もそれぞれ別カテゴリーの事象と見なしたうえで、それらのカテゴリーをともに包括する次元を見出そうとしていた。

２．研究の目的

本研究を含む研究の全体構想は、物心の関係、自己の存在、意志の自由といった、伝統的かつ現代でも注目されている形而上学的な議論を、物理主義的視点ではなく、反対に魂を実体化する立場でもなく、両者における概念化以前の次元から問い直すことであり、そこに西田のような場所的思惟をひとつの方法として用いることであった。

こうした分離以前の状態は、私たちのもっとも基本的な思考枠以前の状態であるため、それを考察対象にすることが原理的に不可能という問題がある。しかし本研究では、そうした不可能性の領域から世界を再構成する立場として西田の場所論を再活用した。しかも場所論はこれまで心や自我の形而上学的な問題との関連で考察されることはほとんどなかった。よって本研究の試みは両者をともに新たな側面から映し出し、各々の可能性について考察し直す試みでもあった。

３．研究の方法

①　クオリアと主観の存在論

まず研究の第一目的である、主観性やクオリアの存在論的な位置の問題については、「心の哲学」の消去主義や随伴現象説においてクオリアや主観性が置かれる位置と、反対に唯心論的な哲学におけるそれらの位置とを対比し、さらに物心に中立な一元論におけるその位置を参照することを目指した。そして世界が物なのか心なのかという議論が、私たちの認識枠に現れる事柄と実在そのものとの取り違えによって生じていることを確認し、そうした認識枠に現れない次元における実在の不可知性の仕組みを探求してゆくことを方法とした。

②　自我と自我以前の問題

この問題については、自我は実在しないとする物理主義的な立場と、逆に世界をすべて自我に映ったものとする独我論的な立場とを対置させた。両者はともに自我を客観的に観察されない何かと見なす点で共通する。独我論でも、自我が観察されるがゆえに存在すると考えられているのではない。つまり、両方の立場とも自我を観察しないのに、世界における実在の位置づけが正反対なのである。それでも両者とも、実在の説明としては一貫した筋道を持っている。つまり経験されていない実在についての概念の違いが、両者の世界認識を正反対にさせているのである。

しかし物理主義も独我論も、それらの真理性は、それぞれによって世界が整合的に説明可能なことに基づいている。そこでその説明に入り切らない事柄については、問題として取り上げないか、黙殺を必要としたのである。そしてこの何かを黙殺しなければ真理が成り立たないのが、真理成立の構造であることも確認された。

③　自由と決定の問題

さらに第三の課題として、自由と決定の問題について扱った。決定論は因果法則の成立を前提とし、その法則は習慣によって経験的成立したという Hume 的な考えがある。しかし他方でこの考えに対しては、因果の形式自体を創り出す者の意志にも必ず原因があり、その限りで因果法則を作り出す習慣自体も因果的に支配されているという考え方も可能である。

しかしここでは、以前には存在しなかった理解や行動のフレームを通じた世界との関りの創出の可能性に着目し、そこに生命の本質を見ようとした。ここで、自由や創出を、単に決定論を破るものとしてではなく、決定論的なフレーム自体を創出の産物として見なす立場を探ることになった。

４．研究成果

ここでは上記①-③の研究テーマに関してどのような結論が出たかを、研究機関中に発表した論文に沿って説明したい。

①　クオリアと主観の存在論に関して。

本研究でクオリアや主観は、物質や客観という実在からは独立した別の実在なのではなく、実在を一定の論理的な枠組みで括っていくことによって、物質という実在や主観という実在が登場すると考える。しかし私たちは、これらの基本的実在を形づくる論理的な枠組みを、それらなしでは言語活動の全体が成り立たない最も基本的な前提として用いている。したがって、これらの枠組み以前の状態へと、この枠を前提とした思考によって遡ることはできない。

これを本研究では、Wittgenstein の *Philosophische Untersuchungen* で展開される「規則」、*Ueber Gewissheit* で展開される「蝶番」を手がかりに考察した（論文⑩）。そこで「規則」や「蝶番」は、それらがなくては言語行為が成立しないにもかかわらず、それら自体は疑われず、真偽の判断から絶しているという共通点を持っていた。しかし「規則」や「蝶番」は、言語そのものではないが、言語の形式に相当するものであり、同

様に真偽を絶した前提でありながら、未規定的な意識である西田の「場所」とは異なることも確認した。西田の「場所」は有無を絶し、かつ非言語的な意識面の性質を持つが、それは物質や精神、主観や客観という基本的区別がそこから生まれる根源でもある、限定以前の実在なのであった。

次に、脳科学は量的、物質的に作用をとらえるのに対して、宗教体験は質的で価値的な体験の極みであり、このふたつの立場をどのように架橋させるかが問題となった。そこで（論文⑦）では、「脳が心を生じさせる」という言明が、ある概念枠と別の概念枠とを関係づけさせようとする、根本的に論理的な錯誤をきたす言明であるという立場から吟味を行った。またこの内容は 2010 年 8 月に、International Associations for History of Religion at Toronto Univ.にて口頭発表した内容の論文化でもある。

さらに（図書②）では、脳神経の物理的状態が宗教経験を解明できる限界点を探ることで、体験世界が物質世界を超え出ているところを示すことを試みた。具体的には、物理主義的な体系に入り得ない主観的状態について、クオリア問題や自己予測の不可能性、分離脳ではどちらがそれまでの「私」になるか、といった思考実験から探っていった。この研究結果は、主観は脳を超え出ているのでも、超え出ていないのでもない、ということであった。これは、宗教経験を物理主義の枠内にも、霊魂論の枠内にもあてはめず、そうした概念化一般以前の場所へと私たちを超越させるものとして理解された。

心は脳でもなく、脳以外のところにある別の実体でもない、というこの見解をさらに敷衍し、脳が心を産出することと、脳は心的な何かの伝達的機能である、という立場の違いについて吟味したのが（論文⑤）である。脳が心を産出する機能であるという考えは、心は脳と同一という主張に与する。反対に、脳は心の伝達的な機能であるという考えは、心は脳と同一ではないという考えに与する。

しかしそうなると、脳以外の「どこ」に心が存するのか、という問題が生じた。これに関して、脳が産出機能ではなく伝達機能であっても、心理現象について同様によく説明できると見なす学説を参照した。心が空間的などこかの位置であれば、脳と心とを同一のカテゴリーに当てはめた上で対比するという錯誤を犯していると考えらえたからである。

このような問題意識も含め、本論では伝達説や、記憶と脳との区別に一定の理解をしつつも、心や記憶と、物質や脳との違いを、精神的な概念枠と、物質的な概念枠との違いとして見なした。ある二者を別物という考え方自体が、二者を同一の概念枠に載せることを条件とするのに対して、脳と心とが別の概念枠の事柄であれば、そこには二者が異なるということさえ成立しないからである。

② 自我と自我以前の問題に関して

このテーマでは、「私」が本当に存在しているのかが問われた。つまり、「私」は論理的な枠組によって存在しているように見られるにすぎず、ある根源的な次元では存在しない、という可能性である。これは「私」の存在に対する虚無ということではなく、存在や非存在を超えたある次元において考えられる、という方向だった。

これについて（論文④）では、Bergson の『物質と記憶』の二元論や、『試論』における持続を、物質と精神、主観と客観という従来の二元論とは別角度から心身を捉えなおすものとして扱った。持続で「私」は存在でも非存在でもないのである。この持続と類似した性質を示すのが、西田の「場所」を形成する、ただ「映す」意識である。「映す」意識は有ではないが、虚無や暗黒でもない。しかし西田のコンテクストでは、それが「無」と言われるのであった。

このように、虚無を生じることなく、独立存在としての「自我」という考えや、「物質」や「精神」という区別以前に戻るとはどのようなことなのかが探求された。そこで次に着目したのが、Bergson の持続としての「生命」であった（論文①）。検討すべきは、実在を概念的に区分することで生じる心身問題や、無からの存在の発生といった形而上学的問題が、この持続としての「生命」の中でどのように解決され得るのかであった。

Bergson の「持続」や「生命の跳躍」は、自然主義的な生命論、たとえばダーウィニズムにおける自然選択のような自然の側の条件で生命の姿がすべて決定されるというような立場に対して、生命そのものを物理的自然とは本質的に異なった何かとして原初から設定するという特徴を持っている。こうした Bergson の生命観は、自然主義の側からすれば、実在しない働きを前提とする非合理な方法である。しかし反対に Bergson からすれば、ダーウィニズムや自然主義的な科学において、客観のみを実在と見なす態度が最初から選択されていることが、根拠なき前提なのであった。

さらにこの内在的性質にかかわることとして、「持続」と概念形式との関係を検討した。Bergson からすると「無」のような形而上学の問題は、「実践上の関心」から生み出された、私たちによる形式と実在との混同がその出所となっている。したがってこうした「実践上の関心」以前に立ち帰ることによって、「無」はもとからあり得ない何かとして見なせることを確認した。このように、「持続」を実在に戻すことで、宇宙の始まり以前は何かという、因果的前後関係によって生じる形而上学的問題などは、まったく違った仕方で現れてくることをも示された。

こうした自我以前、有無の超越ということ

について、西田の『善の研究』で展開される「純粋経験」を題材としながら考察したのが（図書①）である。Bergson の「純粋持続」では「無」は抽象による仮構物と見なされるが、西田の「純粋経験」では、「無」はむしろ積極的な働きを示す。しかし西田の「純粋経験」は、従来は西田哲学内部のコンテクストか、せいぜい James との対比で論じられることが多かった。しかしこの論文の特徴は、「純粋経験」の存在論的な構造を、有無の対立から生じる問題も含め、形而上学の具体的な課題と照らし合わせながら論じたことである。そこで「純粋経験」は単に心理的状態としての経験ではなく、世界の存在様態として探求された。

こうした概念枠以前の経験という立ち位置から、さらに自由意志と決定論、因果律と宇宙の始まり、物質としての生命と目的性のある生命といった、古くから現代まで論じ続けられている形而上学の問題系列を眺め直すことが試みられた。そうした形而上学の問題系の中で、「純粋経験」の立ち位置はどこかを問い、その可能性と限界について吟味することになった。

この存在論的に有無の間の中立性に位置するという「純粋経験」の性質が、形而上学の諸問題に対して持つ意味は、西田中期の鍵概念である「自覚」と「場所」から吟味され直す必要があり、それが（論文⑥）のテーマとなった。本論では「自覚」によって認識の枠組みが作られていく方向ではなく、反対に「自覚」をさかのぼり、「無の場所」に立ち返ることで認識の枠組みが解体される方向に、西田哲学の意義を見出した。それは、この認識枠以前の方向へと遡及するところに、形而上学の問題に対する西田哲学の意義を見出せると考えられたためである。

心身の対立や、実体とは何かといった形而上学の問題も、この認識枠があるから生じる。反対に、「無の場所」への立ち返りによって概念枠が解体されることは、個物と一般、直線的時間と円環的時間のような、絶対的に矛盾するものが同一化するという事態に集中的に見て取れる。世界の根本実在と思われるもの同士の対立によって生じる形而上学的な問題は、この「絶対矛盾」という事態のひとつに相当すると考えられるが、その矛盾対立を解消する論理を求めるのではなく、その矛盾対立を生ぜしめている概念枠以前に立ち還ることが、西田の方法だったのである。

③　自由と決定の問題に関して

私たちは自由であるか、自然法則によって決定されてはいない意志の発動はあるのか否か、というのは哲学史上繰り返し問われ続けてきた疑問であった。そこで本研究では、①②で行ってきた、形而上学的な問いが成立する根拠を問い直すという観点から、自由と決定という問題構造の成立条件に踏み込んだ哲学上の議論を吟味した。

自由か決定か、という問いが成立する根拠以前とは、自由意志の存在が証明される領域ではなく、そこで決定論か自由意志かという形式に則った選択から自由になることを意味する。この形式以前の場所においては、自由意志と同様に、決定論を選択する根拠となる概念枠さえもが未成立となるからである。この未成立の次元とはいかなるものかについて、James の宗教経験の分析と、西田の場所的論理とを対比させながら考察したのが（論文⑧）である。両者とも、形而上学的な疑問への回答を出すことではなく、この疑問が一定の論理的な前提によって成り立つことを看破し、その前提以前への立ち返りを主張する点で共通している。

この前提以前において見られたことは、自由意志の主体としての「私」、つまり決定された世界を前提にして、そこから自発性を創発している「私」が存在する、という構造も消失していることであった。したがって、自由意志を擁護する立場が主張する「私」の「自発性」とは、こうした論理的前提によってはじめて生じるものなのであった。

こうした、形而上学的問題となる概念には前提があるという構造は、積極的な概念だけではなく、消極的な概念にもあてはまる。そこで（論文③）では、ニヒリズムの虚無が生じる場合にも、虚無の論理構造に前提があることを立証した。たとえばニーチェでは、決定論を導く因果律は、もともと原因も結果もない出来事を、原因と結果とに分割することから生じる概念だと考えられていた。出来事の分割は、出来事の側にはなく、こちら側の操作であり、こちらが設けた前提にほかならない。しかし、こうした元来設定する必要のない前提の設定は、道徳批判や永劫回帰、宇宙の始原の非存在など、ニーチェ自身の主張が立脚する隠された前提にもあてはまるのではないか、ということが問題化された。

こうした形而上学的問題を構築する概念が持つ前提は、その前提によって構築される宇宙の姿を定めることにもなる。決定論的宇宙は、因果律という前提から成り立ち、純粋な自発性を含む宇宙も、精神実体という前提から成り立つ。しかし、決定論的宇宙は最初の原因以前は何かという謎を生じさせ、自発性を含む宇宙は最初の自発的主体に関する問いを拒絶する。このように、宇宙を単一の合理的体系によって説明しようとした場合に行き着く形而上学的な問題の姿は、その説明の論理的な前提によって定められてくる。

そうした前提が生じさせる、特徴的な概念の体表的なものとして、九鬼周造の「離接的偶然」と西田の「絶対矛盾的自己同一」とを対比させて考察したのが（論文②）である。前者は運動の「第一原因」の問題と共通するところがある。宇宙の中の出来事を、すべてが原因を持つ因果的な連鎖として考えると、

宇宙における最初の運動だけが例外になってしまうからである。そしてこの例外としての「原始偶然」は、因果律に支配された宇宙という前提から生じるのであった。

この「原始偶然」は、存在を「部分」として把握することに起因していることが、九鬼の主張を敷衍することによって突き止められた。存在の「部分」化とは、非存在と存在とを含めて全体を設定することによって、存在は全体ではなく、その部分でしかなくなる、ということである。すると存在は非存在から無関係に「離接」するため、非存在から存在への移行が、因果関係を絶対的に超越し、説明不可能な「離接的偶然」となる。これが「原始偶然」であり、宇宙の始まりの謎はここで生じる。

それに対して「絶対矛盾的自己同一」は、存在と無とを部分化させて対立させず、全体を全体のまま把握しようとする立場として特徴づけられる。ではここで、精神と物質のように、絶対的に対立する事柄同士はどのように同一化されるのか。この対立については、これらを対立させているのが、後から作られた概念的形成物である、ということであった。つまり矛盾はもともとの実在には見られなかったものであり、したがってこうした矛盾概念を生じさせてしまった論理枠の消去によって「同一」の全体へと回帰するのが、「矛盾的自己同一」という事態なのであった。

こうした対立根拠にまで立ち返った次元は、実在の全体ではあるが、そこで対象的な知の形式は消滅する。つまり、全体への至りと、知の消滅とは同時であることになった。反対に、対象的な知が成立する所では、全体とひとつになれず、世界は離接的に区分されてしまう。宇宙の非存在と存在との離接、客観的宇宙とそれを知る主体との離接は、その代表的なものであった。

このように、対象知としての経験知は科学的な知識の根本的な性質であるが、この知は、知られざる領域との境界が必然的に生じる構造になっている。つまり、知られている領域の外に、知られざる領域が常に控えている構造を持つのである。この知の本質構造について論じたのが、（論文⑨）である。これはたとえば、宇宙の始まりからの全宇宙史が書かれたとしても、その始まり以前が知られないままにとどまることにも見出せる。そしてこの知られる領域と知られない領域との境界は、知られる領域がどんなに拡大したとしても、そのまま基本構造として残り続けることに特徴がある。

またこの対象的な経験知は、その知の内部の組み立てが厳密になればなるほど、その知の体系の前提になる所が無根拠であることを明示する。この知の内部と外部との境界の存続とともに、この知の体系とその前提という構造も存在し続けるのである。

具体的には、原因と結果という区分によって宇宙を探求する場合、その宇宙の内部がどれだけ詳細に知られ、最初の運動の様子がどれほど解明されたとしても、その運動以前という領域は残り続け、そこが謎になる。そして問われない前提の存続ということで言えば、原因と結果という概念区分自体が、ここで解明されようとする宇宙の、問われないまま存続している前提なのである。

こうした宇宙の前提は、現代宇宙論を例に挙げるならば、宇宙を支配する 4 つの場の定数などに見られる。宇宙の運動にはその原因が考えられても、この 4 つの場の力がなぜ現宇宙のように定められたかについて、その原因は今のところ考えられていない。これらの力の定数は、特定の運動の原因のように、それらの原因が探求されることを絶している。しかしこの 4 つの力を枠として、あらゆる運動が宇宙内で展開するのである。そしてこうした無根拠の地点は、どれだけ知が拡大しても残り続けていた。

そして客観知には、その外側が必ず存在した。それは、「原始偶然」のように、そのさらなる原因を想像することが形式上可能だが、実際には遮断されている「外側」の場合もあった。それに対して、4 つの場の定数のように、知を包括する形式については、その根拠についての想像は形式上も不可能なのであった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 10 件）

① 冲永宜司「「生命」はどこにあるのか―ベルクソンの進化と実在についての考察を手がかりとして―」『総合教育センター論集』vol.5, 2014, pp.1-23. 査読無

② 冲永宜司「矛盾と偶然―形而上学的次元の二つの相」『比較思想研究』 第 39 号 2013 pp.59-67. 査読有

③ 冲永宜司「ニヒリズムの成立条件とその消滅」『帝京大学総合教育センター論集』vol.4, 2013, pp.1-22. 査読無

④ 冲永宜司「心はなぜ形而上学の問いとなるか―ベルクソンと西田を手がかりに」『比較思想研究』 第38号 2012, pp.76-84. 査読有

⑤ 冲永宜司「脳が心を生み出すとはどのようなことか」『帝京大学総合教育センター論集』vol.3, 2012, pp.1-31. 査読無

⑥ 冲永宜司「形而上学の問いと西田場所論」（課題研究 西田哲学―その論理基盤を問う）『アルケー』19 号 関西哲学会 2011, pp.16-30. 査読有

⑦ Takashi, OKINAGA. "Is Religious Experience a Matter of Brain?" Bulletin of the Teikyo University Center for Fundamental Education, vol.2, 2011, pp.1-19. 査読無

⑧ 沖永宜司「私の消滅による自由―ジェイムズの神秘主義研究と西田哲学」『比較思想研究』 第 37 号 2011 pp.101-109. 査読有

⑨ 沖永宜司「知の拡大と語り得ぬもの―科学と宗教との境界について」『帝京大学総合教育センター論集』創刊号 2010 pp.1-17. 査読無

⑩ 沖永宜司「規則と場所―ウィトゲンシュタインと西田における根拠なき根源についての考察」『比較思想研究』 第 35 号 2009 pp.46-54. 査読有

〔学会発表〕（計 13 件）
① 沖永宜司「「生命」はどこにあるのか―ベルクソンの「跳躍」と西田の生命論を手がかりに―」 日文研共同研究「日本仏教の比較思想的研究」、於国際日本文化研究センター 2013,9,17

② 沖永宜司「「生命」の存在論―物質、精神、目的をめぐって」日本宗教学会 第 72 回学術大会 於国学院大学 2013,9,8 『宗教研究』第 87 巻別冊 第 72 回学術大会紀要特集 pp.249-50 に要旨掲載

③ Takashi, OKINAGA. “Metaphysics of Pure Experience”, 23rd World Congress of Philosophy: Philosophy as Inquiry and Way of Life, at University of Athens, School of Philosophy, 2013,8,6 *Abstracts*, p.522.

④ 沖永宜司「プラグマティズムと形而上学―ジェイムズとシラーを中心に」 日本イギリス哲学会第 37 回研究大会 シンポジウム II「イギリス思想とアメリカ」シンポジストとして発表 於東北大学 2013,3,26

⑤ 沖永宜司「絶対矛盾の形而上学」招待講演 於東北大学 哲学・倫理学合同研究室 2012,7,4

⑥ 沖永宜司「矛盾と偶然―形而上学的次元の二つの相」比較思想学会 第三十九回大会 於お茶の水女子大学 2012,6,23

⑦ 沖永宜司「心と脳の概念性と実在」日本宗教学会 第七十回学術大会 於関西学院大学 2011,9,3 『宗教研究』第 371 号 pp.490-91 に要旨掲載

⑧ 沖永宜司「心はなぜ形而上学の問いとなるか」比較思想学会 第三十八回大会 於早稲田大学 2011,6,19

⑨ 沖永宜司「形而上学の問いと西田場所論」関西哲学会第 63 回大会 於同志社大学 2010,10,17 シンポジウム「西田哲学：その論理基盤を問う」 パネリスト発表

⑩ 沖永宜司「宗教体験から見た脳と心―心身問題への逆照射」日本宗教学会第六十九回学術大会 於東洋大学 2010,9,5 公募パネル「脳科学と宗教体験――現代における宗教哲学の立ち位置」のパネリストとして発表 『宗教研究』367 号 pp.199-201 に要旨掲載

⑪ Takashi, OKINAGA. "Is Religious Experience a Matter of Brain? " X X th World Congress of the International Association for the History of Religions, at Toronto Univ, 2010,8,17, *RELIGION, A Human Phenomenon* (Proc.), p.93.

⑫ 沖永宜司「私の消滅による自由―ジェイムズの神秘主義研究と西田哲学」比較思想学会 第三十七回大会 於武蔵野大学 2010,6,19

⑬ 沖永宜司「科学と宗教とが扱う領域の相異について」 日本宗教学会第六十八回学術大会 於京都大学 2009,9,12 『宗教研究』363 号 pp.224-225. に要旨掲載

〔図書〕（計 2 件）
① 岩波講座『日本の思想』苅部直・黒住真・佐藤弘夫・末木文美士編、第五巻『身と心―人間像の転変』岩波書店、2013 年、「古典を読む 西田幾多郎『善の研究』」pp.322-335 を沖永宜司担当。

② 『脳科学は宗教を解明できるか？』芦名定道、星川啓慈編 春秋社 2012 年、第四章「概念枠としての物質と心―思考不可能な場所からのまなざし」pp.185-235 を沖永宜司担当。

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）
○取得状況（計 0 件）
〔その他〕
ホームページ等 なし

６．研究組織

(1)研究代表者
沖永荘八（OKINAGA Shohachi）
帝京大学・文学部 教授
研究者番号：80269422

(2)研究分担者 なし

(3)研究協力者 なし